

京都大学	博士（地域研究）	氏名	Bhaskar Gautam
論文題目	Structuring of Communism in Nepali Politics （ネパール政治における共産主義の構成）		
（論文内容の要旨） ネパールにおける共産主義運動の歴史は、共産主義者たちが共産主義者になるより先に民主主義者にされていたということを示している。近年、ネパールのマオイスト運動（Maoist Movement, 以下MMと略）が大きな注目を集めている。MMはネパール史における最大の反乱であり、かつ2008年の選挙における勝利によって民主政治の中心に位置を占めることになった。20世紀末におけるMMの興隆は、新自由主義による「他の選択肢はない」という喧伝の常識化と時を同じくしたことによって、さらに関心を集めることになった。今日のマオイストは中央ネパールと西ネパールで1970年代に再組織された共産党分派をその起源としている。その再組織は東ネパールで1971年にマオイストたちが地主階級の殲滅運動をはじめた数年後のことだった。それ以来、理論と実践の間の齟齬や、実際の武力行使の不在にもかかわらず、ネパールにおいて、毛思想は着実にその影響を拡大してきた。ソ連と東欧で社会主義が終焉したころには、ネパールにおけるマオイストの分派はすでに持久戦の準備を着々と進めていた。1990年にはネパールでも第三の民主化の波に乗った立憲君主制と議会制民主主義が新たに構築されていた。この状況に鑑みて、マオイストたちも武力闘争を延期し、議会制民主主義に参加への参加を決めた。1991年の総選挙においてかれらは全体の4.83%の票を得た。マオイスト政党である統一左翼戦線はネパール会議派（37.75%）とネパール共産党（統一マルクスレーニン主義）（27.25%）に大きく水をあけられながらも第三政党の位置についた。しかし議会政治を通じて国家権力を掌握するのはほぼ不可能であると認識したかれらは、これらの制度を放棄し、1996年2月に武力攻撃を開始した。 本論文は、ネパール共産主義運動の通史の端緒をなすものであり、MMをより広い民主主義革命史のなかに位置づけるものである。本論文は序章と終章を含めた8章からなる。序章のあとの第2章ではネパールにおける先行研究を検討したうえで、それらが共産主義的政党組織の存在を前提としていることを問題にし、1950年代以降の運動がいかに状況依存的で、変容性の高いものであったかを示す。第3章は1970年の地主階級殲滅運動である「ジャパ反乱」がどのような国際的な動きと関連し、その記憶が1990年代の共産主義運動にどのように反省的に引き継がれたかを論じる。第4章では、毛沢東主義がネパールにどのように改編されつつ受容されたかを緻密に論じる。第5章はネパール政治における「暴力」の位置づけについて論じ、それが共産主義政党のみならず、自由主義的な政治家の思考の中心にも存在したことを明らかにする。第6章ではMMによる内戦記の「コミューン」運動などの社会的実験をとりあげ、それらがいかに失敗に終わったかを記述する。第7章では、とくに2000年代以降のMMを検討し、それらを社会運動と民主化論のなかに位置づける。終章においては、本論文の記述と議論を振り返り、MMがと当初予想しなかったような仕方で、ネパールの民族的多様性を反			

映するような民主化の道を切り開いたと論じる。すなわち、本論文はMMが多様な社会的エージェントとかれらの闘争を通して国家の画一的なイマジネーションを超克することを可能にしたと論じている。

MM思想の変遷の検討を通して、本論文はマオイストの知的レパートリーは大まかに言って、つぎの5つの要素からなると論じる。すなわち、「階級の連合」、「空間的動員」、「ヒマラーヤの戦法」、「多元主義のエートス」、そして「終わりなき革命」である。この5つのうち3つは毛沢東の熟読を通して借用されたものであるが、ネパールのマオイストたちはそれにまず「ヒマラーヤの戦法」という根本的な位相を付け加え、そして2年後の1998年に、ネパールの歴史と文化の理解に基づいて「多元主義のエートス」を付け加えた。これらによって、MMはかれら自身の革命のプロジェクトとネパールの歴史を全く新しい方向へと進めていったのである。

反乱の期間、マオイストを強硬に批判していたものたちを含めて、著名な知識人たちはすべてマオイストたちが生産的な政治戦術をとっていると固く信じていた。そのもとになったのはMMの急速な拡大と効果的なプロパガンダ戦術であり、MMが代表制民主主義を受け入れる用意があることを示していたことであった。この変化は、2006年4月の史上最大規模の民主化運動へと結実し、同時に根本的な変化への機会をもたらすことになった。公共的知識人たちもこの歴史的瞬間を、MMを含めたかたちで、進んで受け入れた。知識人達による受容は「思考の産物」であった。これはマオイストたちによる代表制民主主義の受容のあり方とは異なる。かれらは共同の闘争を通じて可能になった「多様な声の融合」によって生まれた力によってそれを受容したのである。この違いは異なる社会集団によってラディカルな政治が根本的に違ったかたちで想像されていることを示している。かれらの支配的な権力の場に、マオイストたちを「入れてやった」と考えている支配的エリートや知識人たちは、この政治変化を「思考の産物」とであると捉え、新しい政治原理と制度のために闘争してきたマオイストたちはこれを共同の闘争を通して可能になった「多様な声の融合」によってもたらされたものだと思えるのである。

この論文の目的は、様々な政治的実験や運動の検討を通して、マオイズム、革命、民主主義といった観念を問題化することであった。ネパールにおいては、理論においても実践においても、国家を、現実存在する差異に対する「公共的有機体」や「公共的な生」としてとらえる見方は間違っている。それゆえあらゆる革命的实践は断片化したものにならざるを得ない。MMも例外ではない。しかしその民主的性格は、ネパールの社会的・政治的空間を拡大し、ラディカルな政治の可能性を大きく開き抗争可能にするための不可欠の要素であったと分析している。